

心奥探訪

〜自分の好きを貫いた男がこだわり抜いた居場所〜

2024年3月末。

まだ肌寒さの残るとある日、繁華街の雑踏から一本入った先にその店があった。
レトロな雰囲気の扉の横には、今日届いたばかりであろう大きな祝い花が飾られている。

「いらっしやい」

その扉が開き、満面の笑みで彼が出迎えた。

昨年5月「飲食店を出そうと思う」という想いをわずか1年足らずで形にした。

走り抜けた準備期間はどんな気持ちで駆け抜けてきたのか。

自身の店のプレオープンを明日に控え、今彼は何を感じ、何を想うのか。

そこには新たなチャレンジを支えてくれた人たちへの想いが溢れていた。

本格的に彼が自身の店に対して動き出したのは9月ごろだったという。

資金調達やそのための書類作成などの事務手続き。

そして何よりも重要な物件選び。

当初考えていた地区ではイメージしている物件はなかなか見つからず、
門前払いを受けることもあったという。

エリアを拡大し、たどり着いたのは30年以上経過していたレトロなカフェバー跡。

11月に出逢ったその場所は仮押さえが出来ず、彼は選択を迫られた。

「いつてまえ！」

立地、内装、その他いろいろな条件を考えた結果、一週間後にそこに決めたという。

その場所に対してのフィードバックも感じる中、最悪失敗してもどうにかなるし、

どうにかすると決めた中での決断。

その店に決めた瞬間は、ワクワクを感じながら、自身を鼓舞するかのようにはいけるっしょと。

しかしそんな彼がこの準備期間を振り返り、自力の無さを痛感したという。

なんとかなるし、自分でなんとかできると当初は思っていた。

店が決まり、いよいよ本格的に店作りが始まる中で一番難航したのが内装だった。

自宅のキッチンのように決まった型の中から使いやすい活用法やレイアウトを考えるのと違い、何も無い状態から自身のイメージを形作るのでは発想が全然違う。

加えてそのイメージを業者に伝えながら、予算という大きな制約もかかってくる。

その中でも親身に寄り添ってくれる業者と協力をしながら進めていたが、工事が予定よりも長引いていた。

「不安や焦りはありましたね」

長引く工事の中、一番の懸念点は予約のお客様だったという。

オープン前に受けていたいくつかの団体予約。

それが無ければ完成が多少遅くなっても自分だけの問題だから大したものではないが、

自分への応援も込めて予約してくれた人たちは裏切れなかったと当時を振り返る。

結果として受け渡しは予約の3日前。

そこから調理器具や食器、食材などの運び込み、宴会用の食材の仕込みなど、

連日深夜まで作業をしていたという。

そして迎えた予約当日。

11名の団体を迎え、初めてのオペレーション、初めての提供に任せてこまいになりながらも無事終了。見送って戻ってきてからようやく実感が込み上げてきたという。

自分の作ったメニューの初めての提供。

身内や近しい人以外の「美味しい」という言葉。

提供する喜びにつながる、自身のやりがいを見出してくれた日だった。

「一番は嫁の存在かなあ」

自身の店をオープンするまでの約7ヶ月。

何よりも強く感じていたのは常に隣にいてくれた人の存在だったと語る。

自分の意見を肯定してくれる絶対的な味方。

「一番そばでそんな人がいてくれたから一歩踏み出す根拠になっていた」

また準備期間の7ヶ月を通して、他力の心強さも強く感じたという。

なんとか出来ると思っていた自分の自信を良い意味で打ち砕かれ、

いろんな人の支えと応援でスタート地点に今立てている。

だからこそ彼は語る。

「新たなチャレンジを支えてくれた嫁、周りの友人に恥じない人生にしていきたい」と。

そして、過去の自分に対しても「よくやったな」と。

一挙手一投足、常に全力で駆け抜けてきた7ヶ月。

自分の選択を正解にするために、何がベストか常に考えてきた。

以前、何を求める人がこの店に来るのか？と聞くと、「私に会いにです。」と彼は答え、その結果、完成した自分のこだわりが詰まった店とメニュー。

こだわり抜かれたメニューや店内の一つ一つに彼の世界が彩っている。

けれどオープンを前日に控え、その言葉の意味が少し変わったという。

「自己表現の場所ですね」

自身を含めたこだわりのつまったこの場所を、この世界を、楽しみに来て欲しい。

好きをつめ込んだこの場所で新たな挑戦が明日始まる。

「いらっしやいます」